学校給食だより秋田っ子給食　NO－257

公益財団法人秋田県学校給食会

コラム「杉」　消えてしまいたい

夏休みの初めと終わりに気になることが毎年ある。初めは給食がなくなり、困窮家庭で痩せる子がいること。終わりは、休み明け前後に自殺する子が増えることだ。

小河光治さん(59)は長年、子どもの貧困対策を国に訴え続けてきた。公益財団法人「あすのば」の代表理事を務める。気になる話を聞いた。

「消えてしまいたい、と答えた子が 2 割近くいるんです」。小河さんは切なそうに話す。

「あすのば」が支援する約 6 千人へのアンケートで、小中高校生がそう答えた。「夏休みは 3 食を出せず、食事を減らして子どもが痩せるという家庭もある。今年は特に物価の高騰が追い打ちをかけている」。そんな嘆きに耳を傾けていると、「もっと心配なのは」と話が続いた。「貧困が気力まで奪い、消えてしまいたいという思いにつながっていることです」

2023 年に自殺した小中高校生は 513 人。最多の 22 年より 1 人減ったが、高止まりが続く。その理由としていつも最も多いのは「不明」だ。学校関係の理由も含まれるだろうが、死に至るほど思い詰めるには、さまざまな困難が複雑に絡み合っていることも考えられる。家庭の事情、特に経済的理由から、生きる気力まで奪われている子がいてもおかしくない。

新宿・歌舞伎町の「トー横」には行き場のない子が集まって事件になる。おなかを満たし、安心できる居場所が必要だ。

☆

無料で食事ができる子ども食堂は空腹な子の味方だが、小河さんはそれだけでは足りないと考える。「夏休みでも給食を出すセンターを中学校区

ごとにつくれないか。大人に相談できるような駆け込み寺になれば、もっといい」。実現すれば、毎年の心配事も少し解決に向かいそうだ。　（令和６年８月８日（木）秋田魁新聞より一部抜粋）